

橋の上の語り

——『ブック・オブ・ソルト』の人物造形と言葉遣い——

吉田恭子

要約

Monique Truong's *The Book of Salt* finds a narrative inspiration in *The Alice B. Toklas Cook Book*. Truong creates the novel's narrator-protagonist Binh out of the characters of Trac and Nguyen, the two "Indo-Chinese" cooks Stein and Toklas hired in Paris. Vietnamese cooks were common at restaurants and middle-class households in the interwar Paris. While expatriates were visible in the public space of cafes and restaurants, colonial immigrants remained invisible in their territories behind the kitchen doors. Another such example Truong brings in the novel is the young Ho Chi Minh, with whom the narrator communicates through the culinary art. Truong also sets up a striking contrast between the narrator's "lavish, imprudent" interior monologue and his clumsy silence in reality, strategically appropriating Toklas's choice of words and Trac's diction. The paper argues that Binh's narrative voice is not a mere English translation of his Vietnamese account, but an imagined voice that does not belong to any particular language, created out of literary allusions and the protagonist's consciousness that never gets articulated in reality.

キーワード：アメリカ現代小説，モニク・トゥルン，『ブック・オブ・ソルト』，
アリス・B・トクラス，英語の他者表象

モニク・トゥルン (Monique Truong) 作『ブック・オブ・ソルト』(*The Book of Salt*, 2003) は、戦間期に国籍離脱者らが集ったパリのガートルード・スタイン＝アリス・トクラス邸を舞台にした小説である。けれどもそこに登場するのは、モダニズム芸術サロンに集うきら星のような芸術家や作家たちではなく、ふたりに雇われたヴェトナム出身の料理人、すなわち正確には「パリの外国人」ならぬ「パリの植民地臣民」である。語り手で主人公のビン (Binh) がフルリユース通り 27 番地で働くのは 1929 年の秋から 1934 年の秋の 5 年間で、ガートルード・スタインが『アリス・B・トクラスの自伝』を執筆出版しアメリカでの名声を確実なものにした時期と重なる。小説は 1934 年、ル・アーヴルの港からアメリカへの講演ツアーへ出発するスタインとトクラスを見送る語り手が、ふたりの下で働いた 5 年間で、さらには同性愛者であることから父に勘当され、商船の下働きとしてサイゴンからマルセイユに流れ着き、その後住み込みの料理人としてパリの家庭を転々としてきた経緯を、非時系列的に、想起されるままに回想するという形をとっている。

モダニズム史上もっとも斬新な言語実験を行ったガートルード・スタインのもとに転がり込んだコックを語り手に据えるこの小説もまた言語実験の側面を備えた作品だが、本作の物語的インスピレーションはスタインのパートナー、アリス・B・トクラスにある。本稿では、トクラスの回想的レシピ本『アリス・B・トクラスの料理読本』に描かれる「インドシナ人」像を確認した上で、植民地出身者の移動・生活手段としての調理と不可視化されがちな彼らの居場所としての厨房という観点から、戦間期の文学的／文化的パリと政治的パリとが料理や食にまつわる労働を通じて繋がっていたことを明らかにする。さらに、本作が調理と食を言語化することでコスモポリタンな都市空間で表に現れることのない植民地臣民を描き出すだけでなく、フランス語と英語が支配する空間において母語による自己申し立てさえままならない主人公の内面を言語化する際にも、食と味覚を媒介とすることで本作が自ら語ることのない主人公の言葉遣いをいかにして創造しているか考察する。

1.

スタインと死別後1954年に出版された『アリス・B・トクラスの料理読本』(*The Alice B. Toklas Cookbook*)は料理本の体裁をとりながらスタインとの暮らしを回想する作りになっており、第10章「フランスの使用人たち」(“Servants in France”)では40年にわたるフランス滞在で雇った数十名に及ぶ住込み料理人のうち特に印象に残った人物が逸話を交えて描かれる。当初はアパートの管理人の紹介で家政婦を雇っていたのだが、伝手も途絶えたところで求人広告を出すことになり、はじめてヴェトナム人料理人を雇う。インドシナ出身の料理人の内、とりわけ印象に残ったトラック(Trac)とグエン(Nguyen)についての回想をまずは概観し内容を確認しておきたい。

トクラスは一連のヴェトナム人料理人らとの経験を総括して、「インドシナ人[料理人]との不安定で信頼できぬが徹頭徹尾愉快的な出会い」(186)と表現し、もし人伝に料理人を雇い続けることができたなら、求人広告を出すこともなかっただろうと示唆している。彼らの雇用はやむを得ない事情の結果なのだった。

ひとりめの「インドシナ人」料理人トラックは放浪癖のある男で、スタイン＝トクラス邸で雇われた後、マルセイユから船のコックとしてインドシナに帰省する。トラックの腕に感服していたスタインとトクラスは、その後も続けてヴェトナム人料理人を雇うが、中でもグエンの腕前は格別だった。彼はサイゴンのフランス総督邸に勤めていたことがあり、総督の帰国に伴いフランスへ渡ってきたのだった。スタインとトクラスはリヨンの東、スイスとイタリア国境近くの山間の村ビリニャンに長期滞在する際もグエンを従えて行く。村人は初めて出会うアジア人に好奇心をかき立てられ、歓待のあまりグエンが酒を飲み過ぎてしまうのをスタインとトクラスは快く思わなかった。

その後、再び旅心に駆られたトラックがインドシナから様々な食材を持ってパリに戻ってくる。彼はルシエンヌというブルターニュ娘とつきあっており、夢はパリで自分のレストランを持つことだった。休日の日曜日にも頻繁にパーティを開くある独身男性のために料理をする副業を続けていたが、ついにルシエンヌと結婚してレストランを開業する。ところが客はまばらで

スタインとトクラスは気を揉むことになる (Toklas 186-93)。

小説に照らし合わせると、主人公ビンの造形と挿話の一部はふたりの雇われ料理人トラックとグエンの人物像を合成して創作されていることがわかる。ピンはインドシナ総督邸の厨房で下働きをしていたが、フランス人料理長と愛人関係であったことがばれて父に勘当されサイゴンからマルセイユ行きの客船に厨房下働きとして乗り込み、パリにたどり着く。数年後「ふたりのアメリカ婦人がお抱え料理人を所望」という新聞広告に導かれ、スタイン＝トクラス邸で働くことになる。雇い主の斡旋で日曜日にはある独身男性のために料理をすることになる。(そしてこの男ラティモアの恋人となる、というエピソードはトクラスの回想からの逸脱部分。) ピンはスタインとトクラスがビリニヤンの別荘で夏を過ごす時もお供をするようになり、アジア人を見たことのない農夫たちに歓待を受けアルコール中毒的な症状に陥ってしまう……以上のような小説の骨格と細部の一部がトクラスの回想に依拠していることがわかる。

トクラスは最初の「インドシナ人」料理人トラックについては、その経緯も含めて詳しく回想している。トラックがトクラス自身の言葉でどのように描かれているか詳しく見てみよう。

トラックは私が藁にもすがる思いで載せた新聞広告を通じてやって来た。広告は当時としては人目を引く冒頭で、「ふたりのアメリカ婦人が所望——」という調子だった。候補者は数多あった。私は最初からトラックに目をつけていた。身のこなしが巧妙で率直な笑顔の人物だったからだ。彼が話すフランス語の語彙はせいぜい二～三十語だった。イチゴを指さして、サクランボじゃない、などと言うのだ。ロブスターは、小型のイセエビで、パイナップルは、ナシじゃないけどナシ、だった。中華料理は繊細で変化に富み滋養になった。トラックが純白の制服に身を包み、電光石火の手さばきで野菜や果物を薄切りするのを見ているだけで食欲をそそられる前菜になった。彼の弱点はただ一点、デザートの商品数がかなり限られていて、しかも芸のないものばかりなのだ。私がいくつか教えてやると、子供のように喜んだ。[…]

トラックがどうやって美味しい料理を作ったのか、もちろん知る余地もなかった。秘密にしているわけではなく、厨房の彼は達人だったからだ。ずいぶん後になって、彼が出ていった後、二度戻ってきて結婚したときに、彼が作っていた料理の材料を奥方に教えてもらったのだが、彼女でさえ分量をまるでわかっていなかった。自分は分量を計らないのだ、とトラックは言っていた。(186-87) ¹⁾

ここではレシピによって調理プロセス再現が可能になった西洋近代料理とそうでない調理伝統のコントラストが際立っている。トクラスの描写には無駄がないが、彼女が描くトラックは、言葉遣いや感情表現は稚拙であるが、模倣不可能なほどに完璧に調理技術を身体化した卓越した存在として尊敬の対象化されると同時に神秘化もされている。アメリカのアジア人表象においては、しばしば食が中心的な修辞の素材となり、調理の真正性がアジア人の身体によって担保されるかのように描かれることが指摘されてきた。²⁾『アリス・B・トクラスの料理読本』においても、他の使用人たちの得意料理がレシピによって紹介されているのに対して、ふたりのヴェトナム人コックの料理は彼らの身体化された職能から切り離せないものとして描かれている。

小説『ブック・オブ・ソルト』との比較の文脈においてトラックの人物造形にも増して目を引くのは、自分や他の人間の独特の言葉遣いを観察し記録に書き留めようとするトクラスの姿勢である。上の引用だけを見ても、小説で重要なモチーフとなるふたつの言葉遣いが見て取れる。

ひとつは冒頭、自らの求人広告への言及で、他の中流家庭とは一線を画した表現で住み込み料理人を募集していることに自覚的であることがわかる。小説では、この「ふたりのアメリカ婦人」という表現は、自らのセクシュアリティがゆえに地球を半周したのちもパリで放浪を続ける主人公にとって、「ふたりの女性」からなる非慣習的な家庭が避難場所のような一時的な居場所となることを示唆している。くわえてアメリカ人とヴェトナム人という同じ異邦人でも立場がまったく違う国籍離脱者と植民地臣民とが帝国のメトロポリスで遭遇する舞台立てを告げている。そうして、「ふたりのアメリカ婦人」を語り手が「奥様と奥様」(my Madame and Madame) とくりかえし呼ぶ例に典型的に見られるように、単調な反復が特徴的な子供のようでありながら清新で詩的な言葉遣いと、きわめて流暢でなまめかしいほどに鮮やかな描写とが共存するこの小説の特徴的な一人称語りへの誘いともなっている。

「ふたりのアメリカ婦人が御所望」というシンプルかつ一風変わった表現は小説冒頭第二章でくり返し引用され、語りにもリズムを与えている。

住み込み料理人

ふたりのアメリカ婦人が所望
お抱え料理人—フルーリュス通り
二七番地。管理人に要問合せ。

ふたりのアメリカ婦人が「所望」？ 求人広告というより宣誓文みたいだ。そりゃあ、昨今のパリのふたりのアメリカ婦人なら「所望」するしかないわけで、だって所望するのは受け取ることだから。それに対して欲望は、まるでアメリカ人らしくない。僕はこのなかなかにぴったりでぴりりと辛い社会批評を自画自賛した。さて、ここで僕が「ぴったり」とか「ぴりりと辛い」をフランス語でどう言うかわかってさえいれば、自画自賛をやめて、公園で三つ隣のベンチに掛けている美青年と話を始めるところなのだが。外国語習得の皮肉は、自分の欲望をかき立てるだけの安っぽくてぎりぎり役に立つだけの表現ばかり身につけて、その欲望を満たすような豪勢で身の程知らずの表現がいつまでたっても決して身につかない点だ。(Truong 11, 下線部は引用者による。以下同)

ここでも単純な反復と流暢な描写とが隣り合わせになっているが、気になるのは、小気味のよいほど意地の悪いエスプリの持ち主である語り手は、「このなかなかにぴったりでぴりりと辛い」と自画自賛する「社会批評」を言語化することができないという点である。その直後から明らかのように、語り手はフランス語に不得手で、英語に至ってはまったくしゃべることも読むこともできない。そのような主人公の語りがスタインとトクラスの執筆言語である英語で展開していることも着目に値するが、それよりも、高度に言語に依存するはずである機転や嫌味がテキスト上に成立していること自体が驚くべきことだといえる。しかもこのような語りの意

識が主人公に豊かな人格を与えると同時にその信憑性を削ぐことがない。このような語りを与える新鮮な驚きの感覚こそがこの小説の大きな特徴かつ最大のミステリーだといえるのではないか。いったいこの「語りの言葉」はどこからやってきて、何語のどんな言葉で展開しているのだろうか。この英語でもフランス語でもないのに高度に言語化された語り手の意識については、のちほどふたたび検討したい。

トクラスの回想に戻って、もうひとつの言語的特徴である限定された語彙に関する箇所を確認しておこう。おそまつなフランス語をからかうトクラスに悪意はないであろうものの差別的な視線がうかがえる一方で、調理上の知識と言語力の欠如のギャップを埋めようとするトラックの想像力と機転をトクラスが評価していることもうかがえる。この部分は小説第4章において、「梨だけど梨じゃない」パイナップルというビンの言葉遣いにスタインが敏感に反応するエピソードの下敷きとなっており、後の文学史に名を残すことになる詩人がヴェトナム人のコックを雇ったのではなく、ヴェトナム人コックの急を凌ぐためではあるが創意あふれる言葉遣いこそが『やさしいボタン』（1914）の作者にインスピレーションを与えるという立場逆転の潜在的可能性を仄めかしている。また、この場面では上で指摘した反復を伴う単純化された言葉遣いと感覚的な味覚の描写のコントラストが先の例よりも鮮やかに表れている。

ガートルードスタインのフランス語は、僕と同様、限りがある。フランス語が彼女を拒むのだ。[...] 彼女のフランス語を耳にすると、喜びに近い何かに満たされる。その荒々しさ、その言い訳なしに堂々たる態度は尊敬に値する。僕のフランス語の仲間だと感じる。[...] これが僕らの共通点だと感じる。

ガートルードスタインも僕の、その、フランス語解釈に興味を示す。僕の否定形と反復の使い方に励まされている。言語を素手のこぶしで原始的なまでに叩き割るさまを目撃し刺激を受けている。彼女は共謀者なのだ。もちろん見ものを喜ぶに決まってる。[...]あの日の午後、僕がミス・トクラスに尋ねたかったのは、奥様方がお客をふたり招待した晩餐用にパイナップルをふたつ買う予算があるかどうかだった。僕が伝えたかったことは、ひとつめのパイナップルは紙のように薄く輪切りにして、エシャロットと薄切りの牛肉と一緒に炒めると、パイナップルの糖分が熱でカラメル化して、癖になるような微かな燻したような風味が加わること、その料理は母の得意料理を洗練させ変化させたものなのだったということだった。僕が伝えたかったことは、ふたつめのパイナップルは一口大に切ってキルシュに浸し、スプーン大のタンジェリンソルベを乗せる大人のベッドにするのだということ、淵はホイップクリームを象牙色のバラ型の飾りにして囲むのだということだった。それから見栄っ張りの僕は自分のおかげで湧き上がる称賛を耳にしたいがために、ソルベの上には砂糖の結晶がきらめくスマイレの花びらの砂糖漬けを散りばめるつもりだと僕は伝えたかった。

「奥様、わたし、梨…だけど梨じゃないを買いたい」

ミス・トクラスは理解不能という目つきで僕を見た。

そう、僕が口を開いた瞬間に「パイナップル」のフランス語が消えてしまったのだ。[...]僕は同じ問いをくりかえしたが、今度は手のひらの付け根だけを髪に当てて両手を頭上に持ってきた。半ば広げた扇子を二本立てたように指を広げてみせた。冠を携えて、僕は新しい奥

様と奥様の前に「梨だけど梨じゃない」を体現して立っていた。ガートルードスタインが微笑んだのを覚えている。[...] 後々、もっとじっくりこの言語変異を研究するためにとっておこうと、彼女の舌が僕の言葉を包み込むのを。(34-35)

うまく言葉を見つけられないビンが「奥様、わたし梨…だけど梨じゃないを買いたい」としびれを切らして発言する直前の長い段落では、引用下線部のように、“I wanted,” “I wanted” と繰り返すことで、「かき立てられた欲望を満たす豪勢で身の程知らずの表現力」を持ち合わせない語り手のジレンマが表現されている。パイナップルを使ってどのような一品とデザートを調理できるか、そしてそれはどれほど美味で香りよく見目麗しい料理となるか、語り手は鮮やかに思い浮かべることができる一方で、その言語化がかなわない失語状態に陥るという心の内と現実のギャップの切なさが、描写が詳細に重なれば重なるほどつっていくという逆説的效果を生んでいるのだ。しかもこの場面は一見極めて饒舌であるけれども、実は傍から見れば長い沈黙でしかない。この長い間の後に、頭上で両手を花のように広げて自分の頭をパイナップルに模してみるという滑稽なジェスチャーを伴って、ようやく発せられる「奥様、わたし梨…だけど梨じゃないを買いたい」という必死の発話を「ガートルードスタイン」が舌なめずりしてわがものと盗み取る瞬間は、小説の結末近くでビンがスタインから盗んだノートが、彼を中心に据えた『塩の書』(*The Book of Salt*)という作品の手稿であったというプロットの伏線となっているともいえる。

2.

このように、小説『ブック・オブ・ソルト』では、トラックとグエンという実在のベトナム人調理人を架空の人物ビンに重ね合わせているわけだが、トゥルンが小説世界に取り込んでいる実在の人物はそれだけではない。小説半ば、トゥルンは語り手とホー・チ・ミンをパリで邂逅させている。

語り手の回想によると、それは1926年のことで、ビンは24歳、スタイン＝トクラス邸に雇われる3年前のことで、ホー・チ・ミンは36歳である。行き場もなく短期の仕事を転々としながら半ばホームレス状態でパリを放浪するビンは、しばしば橋からセーヌ川の水面を眺め³⁾、商船の厨房下働きとしてベトナムとフランスを往来した日々思いを馳せつつ将来に不安を抱く。ある晩そこで同胞と出会い、久々にベトナム語で言葉を交わすことになる。橋の上の男はビンの独特の言葉遣いからビンがコックであると指摘する。ふたたびここでも言葉と食、すなわち言語表象と調理とが密接に絡み合っ提示されるのである。そこでビンも男が菓子職人であることを言い当て、そこからふたりの会話がはじまる。

お互いの来歴を徐々に明かしつつも、橋の上の男は決してすべてを語ろうとしない。バーという通り名でエスコフィエというシェフの下で働いたことがあり⁴⁾、他にも厨房下働き、庭師、写真修正師、などの職を転々とし、貨物船ラトゥッシュ・トレヴィル号 (*Latouche Tréville*) では船員の代筆屋として活躍したことを得意気に回想する。昔パリに4年滞在したことがあり、今回は短期の訪問であることを告げる橋の上の男に、ビンは男が以前住んでいた通りについて、

名前を聞いただけで、それが左岸か右岸か、何区なのか、どこにあるのか正確に言い当ててみせようと挑戦する。実はこれこそが語り手の特技であることが小説のはじめで明かされており、フランス人からすれば「見えない存在」である植民地臣民の主人公は、どんな小さな裏通りも含めてすべてのパリの通りの位置を記憶することによってささやかながらもパリをある意味「わがものにしていく」ことを読者は知っている。橋の上の男は自分が最初に住んでいた通りの場所を言い当てることのできるならば、食事をごちそうすると宣言し、コンポワン袋小路（*impasse Compont*）という17区の小さな袋小路の場所を言い当てたピンは、橋の上の男とともにデカルト通りの「中華料理屋」を訪れる。そこで至福の晩餐の後、男と語り手はリュクサンブール公園でともに夜を明かすことになる。

その後小説の結末で、自分を裏切った恋人マーカス・ラティモアの写真を受け取るために写真スタジオを訪れた語り手は、偶然にも橋の上の男のポートレートを目にし、彼の名が阮愛國（*Nguyen Ái Quốc*）であり、優秀な写真修正師であったことを知ることになる。そこでピンは恋人の写真の代わりに橋の上の男阮愛國のポートレートを買い求めるのである。

阮愛國はホー・チ・ミンのヨーロッパ時代の通り名であった。菓子職人の助手であったこと、貨物船で船員の代筆をしていたこと、またパリで一時期写真修正技師として働いていたことなどは、ホー本人による回想と一致しており、読者は橋の上の男が実はホー・チ・ミンであったことを知ることになるが、歴史的炯眼もなければ男の本名を知ることもない語り手は、橋の上の男がヴェトナム独立の父となることを知らぬままに小説は幕を閉じる。

マイケル・ゲーベル（*Michael Goebel*）は『反帝国主義のメトロポリス—戦間期のパリと第三世界ナショナリズムの萌芽』（*Anti-Imperial Metropolis: Interwar Paris and the Seeds of Third-World Nationalism*）で、第二次世界大戦後に独立するアジア、アフリカ、ラテンアメリカの元植民地の政治活動家らの多くが戦間期のパリに滞在していたことに着目し、民主共和國的普遍主義という建前と帝国主義的植民地臣民の差別的待遇という本音が交差するフランスの現実が彼らの政治意識形成に与えた影響を指摘するとともに、国際都市パリが同胞の政治活動家が集う場所としてだけでなく、食・音楽・婚姻・教育を通じて、異なる大陸・文化圏の政治活動家が邂逅する場としても機能したと指摘して、より横断的な視点を持って人材交流を把握することが必要だと強調し、戦後の反帝国主義的第三世界の連帯意識はこの時期のパリで萌芽したのではないかと示唆している。

パリに暮らした国籍離脱者文学者や芸術家にとってラ・ロトンド（*La Rotonde*）やドゥ・マゴ（*Les Deux Magots*）やブラッスリー・リップ（*Brasserie Lipp*）のようなカフェやレストランがコミュニティ形成の場となったことはよく知られているが、食堂は植民地臣民にとっても、仲間が集う公共の飲食の場としてだけでなく、経済活動・労働の場として重要であった。食堂は店主・コック・調理見習い・ウェ이터・皿洗い・厨房下働きなど階層化された労働力が共に働く場であり、移民にとっては独立して経営をする最もてっとり早い手段のひとつであった。また、図1に見える通り、インドシナ出身のヴェトナム人移民は住み込み料理人としてパリの中流家庭に広く浸透していた。同時に食堂はパリで政治活動を展開した外国人にとって情報収集リエゾンの役割を果たした。とりわけカルチュエ・ラタンにあった3軒の中華料理店は、中国系移民の下宿先、中国系そしてヴェトナム系移民の政治集会会場、アフリカ系移民、アンティエー

ユ系移民の会合場所として有名で (Goebel 74), そのうちのロワイユ=コラル通り (rue Royer-Collard) 17 番地は現在も東紅飯店という中華料理店がある。またなかでも大学図書館のあるクジャス通り (rue Cujas) は植民地からの留学生が密集している通りだった。

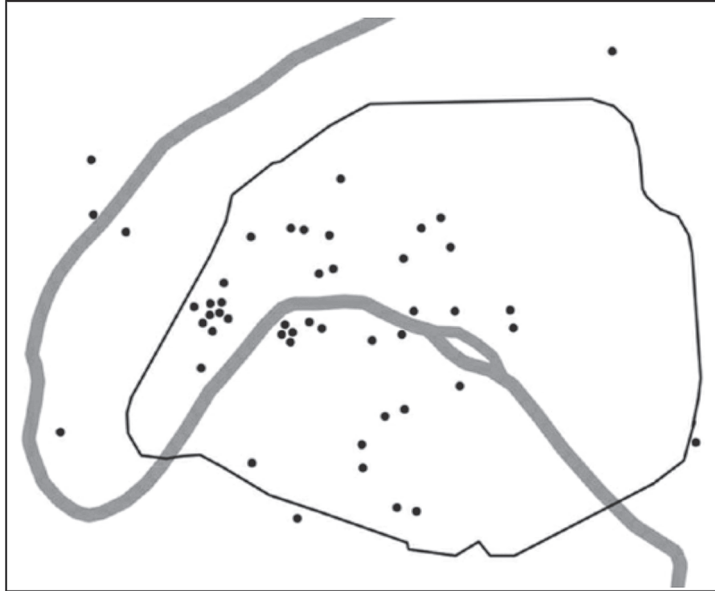


図 1 : 1929 年中頃, オッシュ通り 27 番地のカフェ常連のベトナム人コックの住所。
1929 年 7 月 2 日ヴァンサン調査官により提供。(Goebel 70)

ここでホー・チ・ミンの伝記を振り返ると、はじめて彼がベトナムを出国したのは 1911 年である。先出のラトゥッシュ・トレヴィル号でサイゴンを出てマルセイユに到着、植民地学校の入学がかなわなかった彼は、その後船員として北アフリカのフランス植民地、アメリカ合衆国、ラテンアメリカ、ヨーロッパを訪れる。1913 年にアメリカからイギリスに渡り、エスコフィエが総料理長を務めるロンドンのカールトンホテルで菓子職人の助手を務め、1917 年にパリに戻った後、1919 年にフランス社会党に入党、1920 年にはフランス共産党の結成に参加する (Duiker; “June 8;” “Les traces du president Ho Chi Minh en France”)。

青年ホー・チ・ミンにとって、船員の仕事は生活の手段であると同時に世界を見て学ぶ移動の手段でもあった。1919 年から 21 年にかけて 13 区のプラスディタリー北西のゴブラン私道 (villa des Gobelins) 6 番地に住んでいたホーは、一時期写真修正師の職を得て 17 区に移り住む。Goebel によると、写真修正の仕事はコックの仕事同様に当時多くのベトナム人移民が携わる仕事のひとつであった (Goebel 27-28, 101, 105)。

さて、小説に戻り、語り手ビンが橋の上の男とテーブルをともにしたデカルト通りの中華料理店の場面を見てみよう。

「友よ、晚餐を約束したからには、上等の食事になる」彼は左手を僕の肩に軽く預けて言った。右手で扉を開き、僕らは店に入る。店の内装は一目見るなり、まあ、中華らしからぬ印象だっ

た。赤い文字も、金色の文様飾りも、ぴかぴかの籠も、つるつる腹の仏像も、フランス人がまともな中華料理店に求めるものはなにひとつ存在しなかった。空っぽなものももっともだ、と僕は思った。これで、ジャンやジャックやジュールの店とどう区別しろというのだろうか？ほら、しかも可愛いフランス人レジ係までいて、のっけから無視を決め込むことができる戦略的位置、正面扉のすぐ内側に座ってる、と僕は思った。(Truong 94-95)

その店は、中華料理店らしき飾りはどこにもなく、若いフランス人女性がレジスターにちょこんと座っているばかりで客もいない。しかも、橋の上の男がアメリカで知り合ったというシェフはとても内気なので厨房から出てこないという。レジスターの女性に橋の上の男がエビの胡椒炒めを注文するので、語り手は見るからに貧乏そうな彼にそんな高級料理を奢る手持ちがあるのか不安になる。そうしてエビの胡椒炒め、さやいんげんのにんにく生姜炒め、クレソンの炒めもの、白飯とワインが供される。これらの料理は一見正統派の中華・ヴェトナム料理だが、口にすると一味違うことがピンにはわかる。さやいんげんのにんにく生姜炒めには高級食材のモリユ茸、エビの胡椒炒めには焦がしバター、炒めたクレソンにはフルール・ド・セルがそれぞれ隠し味として加えられている(96-97)。橋の上の男によるとこの店のシェフには放浪癖があって各地を旅しているらしく、ふたりが味わっている料理は今風に言えばフュージョン料理、シンプルな古典的ヴェトナム料理にフランス風の隠し味でひねりを加えた品々なのだ。最後に食堂のおごりとして振る舞われたデザート（といってもすべての料理が実は店のおごりなのだが）は、アップルパイで、フランス風のタルトではなくアメリカ風のシナモンが効いたパイであった。レジスターの女性は橋の上の男に今夜限りであなたがフランスを去ってしまうのは残念だとシェフから伝言を伝える。シェフは結局姿を現すことがない。極上の料理ですっかり満たされたピンと橋の上の男は、連れ立って夜のリュクサンブール公園へと消えてゆく。

このいかにもいわくありげなデカルト通りの謎の「中華料理店」は、ゲーベルが指摘するようなカルチュ・ラタンに並んでいた政治活動家らの連絡拠点として機能していた食堂を彷彿とさせる。自らの正体を明かそうとしない橋の上の男と彼の忠実な同志であると察せられるシェフは、ふたりとも商船で働き世界中を旅してきたヴェトナム人で、決して顔を合わせることはないが、シェフの一皿一皿を通じて心を通わせるというこの場面は、単なる味覚の喜びを超えたもてなしの情愛に満ちている。

実はこの場面でシェフが決して姿を表さないためにいわくありげな印象を与えてしまうのもうひとつの理由がある。厨房に隠れている自称内気なシェフは、トク拉斯の回想に登場するインドシナ人像から生まれたもうひとりのヴェトナム人コックなのだ。再度『アリス・B・トク拉斯の料理読本』から放浪癖のあるトラックについての記述をふり返ってみよう。

この[シェフの帽子の]せいでトラックはルシエンヌとすぐに結婚してレストランを開店する決断をしたようだった。そういうわけでもうすぐ住み込みの仕事を辞めると言うのだ。彼はルシエンヌを連れてきてくれた。とても見目の良い、教育のある、中産階級のブルターニュ娘だった。彼女はトラックに恋していて、彼のことを私のジャンちゃんと呼んでいた。彼をフランス男に仕立て上げるつもりなのだ。[...] そうしてひと月後ふたりは結婚し、カルチュ

に頃合いの小さな貸レストランを見つけて、いい感じに壁を塗り直し、家具を改めて、腰を落ち着けて客を待つことになった。とうぜん私たちは最初の客に交じっていた。[...] ルシエンヌとトラックはレストラン経営者になって幸せいっぱいだったが、店にいるのは私たちだけだったので、私たちは残念で居場所のない気分だった。レジ係のルシエンヌはドアの近くのデスクの高い椅子にフランス風に腰掛けていた。(Toklas 193)

ひとりめのヴェトナム人コックだったトラックには放浪癖があり、ルシエンヌというブルターニュ女性とつき合っていて、彼女とレストランを開業するのが彼の夢だった。その後、無事にふたりで小さなレストランを開店するのだが、さっぱりお客が来ないのでトクラスとスタインは心配をしている。回想では、ルシエンヌが店のレジにちょこんと座っている姿も描かれている。つまりデカルト通りのシェフもまたトラックの化身で、主人公ビンの分身、あるいは半身なのであり、だからこそ、彼の前に姿を現すことが不可能なのだともいえる。

3.

レベッカ・L・ウォルコウイツ (Rebecca L. Walkowitz) は、『ボーン・トランスレーテッド——世界文学の時代の現代小説』(*Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature*) で、『ブック・オブ・ソルト』をジョシュア・ミラーが言う「訛り小説」(accented novels) に分類し、ジュノ・ディアスの『オスカー・ワオ』で、英語とドミニカのスペイン語とニュージャージーのスペイン語話者の間で使われている口語表現の三者をどれも不可欠な要素として語りに融合させる試みに比べると、新しさに欠けると指摘する (Walkowitz 37)。「訛り小説」は、移民の発話の音や、ところどころに英語以外の単語を会話に取り入れるが、地の語りでは、標準英語を用いている、という指摘である。

けれども、『ブック・オブ・ソルト』には実は「訛りのある英語」は出てこない。なぜなら、移動労働者の語り手はまったく英語が話せないので、訛りようがないのだ。ここまで見てきたように、『ブック・オブ・ソルト』では、フランス語に不自由な語り手の失語的発話とあざやかな内的独白のコントラストが語りの特徴となっている。

おそらくウォルコウイツは『ブック・オブ・ソルト』をエイミ・タンの『ジョイ・ラック・クラブ』(1989)などと混同している。タンと同時代に数多く世に出たアジア系アメリカ作家の小説では、作者と同じアメリカ生まれの子供の世代の視点を通して、移民である親の世代との葛藤が描かれるが、その際、「訛りのある」両親の不自由な英語と、完全に流暢な子供の世代のアメリカ英語(これは作者の世代の英語でもあり、小説の主要言語でもあり、アメリカ作家として自らを証明する言語的卓越性でもある)の差異が世代格差の比喩として用いられてきた。

けれどもこの小説は、英語が全く話せずフランス語も不自由な語り手による内的な独白を英語で表した小説である。だとすれば、ビンの言葉はいったいどこからやってきた、どのような言語なのか。もちろん、表面上の解答は、ビンはヴェトナム語で語っており、この小説はヴェトナム語の内的独白を英語で捉えた、ウォルコウイツが言うところの「生まれながらに翻訳された、ボーン・トランスレーテッドな」小説ということになるかもしれない。しかしそれは

あくまでも便宜上の解答でしかない。なぜなら、この小説の描写は、英語やフランス語で自ら申し立てることができない移民の母語による声を流暢な標準英語に単に移し替えただけのものではないはずだからだ。移民の失語症は単に移住先の言語に不自由であるという現象ではない。英語やフランス語の問いかけや決めつけに応答できない一方で、異文化・異言語環境に長くさらされた移民の母語そのものもまた限定され、貧しくなり、失語の状態に陥る。話し相手もなく、言語が依存する文化社会的文脈も失い、言語の構造が移住先の言語と違うがゆえに内的な反論でさえ不十分だと感じ、自らの言語能力が縮小減退したかのような感覚を味わうのである。通訳や翻訳が間に立ちさえすればヴェトナム語で十分に自らを弁護し自己主張ができるというわけではないのだ。この小説は、フランス語や英語だけでなく、ヴェトナム語でも失語状態の語り手の胸の内にある、言葉になる以前の言葉を英語の語りに映し出した作品、といえるかもしれない。英語になりえない意識を英語で語っていることをこの小説の語りは前景化している証がこの小説の表題である。

表題『ブック・オブ・ソルト』はふたつのテキストを指している。今私たちが手に取っているトゥルンによる英語の小説と、ビンが恋人のマーカス・ラティモアにそそのかされて盗んできたスタインによる手書きの草稿である。英語が読めないビンには自分の名前が何度も出てくること以外には、そこになが書かれているのかまったく理解することができず、したがって読者にもその内容は明らかにされないままとなる。ただ、ラティモアが手紙に残した「スタインは君のことを完璧に捉えている」(238)というひと言から想像するしかないが、「発話(あるいはその欠如としての沈黙)」と「内的独白」のギャップを特徴とするビンの語りにつき合ってきた読者からすれば、スタインが捉えた姿はたとえ第三者にとって「完璧な姿」でも本人の申し開きとはかなりの違いがあるだろうと推察せざるをえない。よって、いま読者が読んでいるテキストは、スタインによる創作ではなく、ビン自身によるカウンターナラティブ、盗まれた自分の物語を取り戻す行為であると結論づけたくなるかもしれない。⁵⁾ けれども、ビン自身のカウンターナラティブには『ブック・オブ・ソルト』という表題はあてはまらないのだ、ということの本論では強調しておきたい。この表題はあくまでスタインの架空の英語作品とトゥルンによる英語小説の表題なのである。そしてこれまで見てきた通り、トゥルンのテキストはビンの内的独白を英語に翻訳したものではない。トゥルンのテキストはあくまでも想像の力で新たに創り出された語りなのだ。そう考えると、スタインの作品について読者は想像するしかないと同様に、ヴェトナム語ができない者はけっして触れることができないビン自身の表題がないカウンターナラティブについても、我々は想像するしかない。そしてその語りにスタインの架空の作品と同じ表題が与えられることはないであろう。

ビンと同様にフランス語に堪能ではないガートルード・スタインは、彼の意のままにならぬがゆえに独特の言葉遣いに興味をいただき、あれこれとものを指さしてはそれをフランス語でなんと表現するかたずねるゲームをくりかえしてきた。そしてついに「愛とはなにか」と問うスタインに対し、不自由な言葉遣いの裏に植民地臣民としての苦勞を嗅ぎ取ろうとしていると感じたビンは頑なに沈黙を守り、ただ西洋花梨の鉢を指差し首を振る。その場面から数ページの後、章の終わりを締めくくることが語り手の以下の独白である。

ガートルードスタイン、マルメロは熟すと宙を飛ぶカナリアの翼と同じ黄色になるのです。マルメロは熟すと青りんごの香ばしさと包み込むような珊瑚色のバラの香りとか鼻をくすぐります。でもそうであってもマルメロの実は硬くて強情なままで、食用にするには、弱火でじっくりとろとろと煮込んで柔らかくしてあげるのです、ガートルードスタイン。パサパサで骨色をした実が、蜂蜜と水を加えると熱を帯びて、表面が艶やかなオレンジ色に、寝坊のあなたが決して目にすることはない朝日の色ではなくて、味わうことができる色、木に熟したパイヤの実の色になっていくのを御覧なさい。ガートルードスタイン、あなたの質問に答えるなら、愛とは、青白の陶磁碗に盛られて目にされながらも触れられることはないまま熟しつつあるマルメロではありません。(Truong 40)

遅ればせながらのビンの応答は、言葉にならない言葉、トゥルンによる想像の描写であり、ガートルード・スタインへの語りかけとなっていながら、彼女には決して届くことのない、二重の意味で言語化されることのない応答なのである。

トゥルンによる英語小説『ブック・オブ・ソルト』は、パリのヴェトナム人移民による証言そのものではなく、想像上の言語、どの陸地にも属さない言語、いわば「橋上の言語」を英語の語りに映し出した作品であり、その英語は主人公自身のものではないが主人公の失語的言葉遣いを反映しているのと同時に、スタインのものでもないがスタインの言葉遣いを反映している。英語がまったくできないビンと英語で創作するスタインの間を結ぶのはフランス語である。ふたりともフランス語には不自由で、それが故の言葉遣いを武器にする点においてふたりは共犯関係だとピンは察していた (Truong 34)。表題が二重に作品を言及していることは、ふたつの別個の作品への言及というよりも、ふたつの言葉遣いが重なり合った状態を指している。スタインの英語はヴェトナム人料理人の想像上の語りの隠し味となっているのである。

注

- 1) 英語テキストからの引用は、『ブック・オブ・ソルト』を含めてすべて引用者による翻訳である。小林訳を参照した。
- 2) アジア人表象における食の中心性がもたらす問題とその可能性については、Xu, Mannur, そしてCruzの議論を参照した。
- 3) 小説中の記述からロワイヤル橋かコンコルド橋と推測される。
- 4) フランス料理のシェフ Georges Auguste Escoffier (1846-1935) のこと。
- 5) 小説『ブック・オブ・ソルト』をビン自らの語りによるカウンターナラティブと見なす論については、TroengやXuを参照のこと。

引用文献

- Cruz, Denise. "‘Love Is Not a Bowl of Quinces’: Food, Desire, and the Queer Asian Body in Monique Truong’s *The Book of Salt*." *Eating Asian America: A Food Studies Reader*, edited by Robert Ji-Song Ku, et al., NYU Press, 2013, pp. 354–70.
- Duiker, William J. *Ho Chi Minh: A Life*. Kindle Edition. Hachette Books, 2000.
- Goebel, Michael. *Anti-Imperial Metropolis: Interwar Paris and the Seeds of the Third-World Nationalism*. Cambridge UP, 2015.

- Mannur, Anita. *Culinary Fictions: Food in South Asian Diasporic Culture*. Temple UP, 2010.
- Miller, Joshua L. *Accented America: Cultural Politics of Multilingual Modernism*. Oxford UP, 2011.
- Stein, Gertrude. *Tender Buttons: Objects, Food, Rooms*. 1914. A Public Domain Book.
- . *The Autobiography of Alice B. Toklas*. 1933. A Project Gutenberg of Australia eBook, 2006.
- Toklas, Alice B. *The Alice B. Toklas Cookbook*. 1954. Serif, 1994.
- Troeung, Y-Dang. “A Gift or a Theft Depends on Who Is Holding the Pen’: Postcolonial Collaborative Autobiography and Monique Truong’s *The Book of Salt*.” *MFS Modern Fiction Studies* 56.1 (2010). pp. 113-35.
- Truong, Monique. *The Book of Salt*. 2003. Mariner Books, 2004.
- Walkowitz, Rebecca L. *Born Translated: The Contemporary Novel in an Age of World Literature*. Columbia UP, 2015.
- Xu, Wenying. *Eating Identities: Reading Food in Asian American Literature*. U of Hawai’i P, 2008.
- “June 8: President Ho Chi Minh and This Day in History.” SÀI GÒN GIẢI PHÓNG Online. <http://sggpnews.org.vn>
- “Les traces du président Ho Chi Minh en France.” RADIO LA VOIX DU VIETNAM - VOV INTERNATIONALE. <http://vovworld.vn>
- トゥルン, モニク. 『ブック・オブ・ソルト』 小林富久子訳. 彩流社, 2012.

